



今月は、阿蘇の自然を守り続け、「自然と人との共生」を永遠の課題とされる高村貴生さんをご紹介します。

高村 貴生さん
(農林業、73歳、茗ヶ原)



高村さんが自然保護に思いを寄せ始めたのは34年前。当時「阿蘇の自然と文化を守る会」(幸仁哉会長)が調査し発行していた季刊誌「あすなろ」を読み始めてからです。当時は公害に及ぶ開発や山の碎石場問題などが取り上げられ、これに対し同会は「開発も必要だが守るべき自然は必ず保護する」と訴え、それまで元阿蘇高校教諭の幸会長が行ってきた研究と保護への意識の高さに感銘し

高村さんも活動を開始されました。

高村さんは、農林業を営み、自然と共に生活しているのです。自然のしくみや大切さはよくわかっていくつもりでした。しかし、会の活動で調査研修を続ける中で、自然の形態を本当に知るには、とても長い年月、根気強く調査を続けなければならぬこと、また、些細な自然破壊が地形の変化や動植物の生態サイクルの変化を招く場合があることなどを多くの関係者から学びました。「生きるため、経済発展のために必要な開発と、決して壊してはならない自然がある」その見極めが大事で十分気を遣わなければならぬことを当時から実感されています。

自然と人を結ぶパイプ役

それから高村さんは地道に阿蘇の自然と向き合われ、山を歩き谷の下りを繰り返し、その歩数が表すかのように、現在では、動植物・阿蘇の形態に詳しい存在となっております。今や草花や鳥たちの方が、高村さんが来るのを待っているかのようで、「自然からも頼れ

る存在」となっているようです。

現在、高村さんは、環境省自然公園指導員阿蘇地区連絡会会長、阿蘇山遭難事故防止対策協議会委員、熊本県自然ふれあい指導員阿蘇地区副会長、阿蘇くじゅうエコツーリズム協会副会長、阿蘇の自然を愛護する会事務局長、阿蘇市野生動植物保護審議会委員などを務め、一昨年は、自然公園関係功労者として環境大臣表彰を授賞されています。

この30年間で阿蘇の自然がどのように変わったか何うと、「温暖化」の影響が多方面で見られるとのこと。「希少動植物においては絶滅の危機を越え、湯浅陸雄氏との調査では、もうすでに阿蘇で姿を見ることができなくなった植物が10種を超える。鳥もヤマセミやゴイサギなど大型の渡り鳥が山地で見られるようになり、鳥の居住層が川上へ上がってきた。地形では高岳・根子岳など標高が高い山に登ると、突然ものすごいスコールが降るなど気象の異変を感じる。この激しい雨で山の高い方で崩壊している箇所が出てきた」など数々。



▲大先輩と尊敬する高橋佳也さん(左)らと野草の盗掘パトロールに務める高村さん(右)

では、これからこの自然とどのように共生していけばいいのでしょうか？

「先日、阿蘇地域でジオパーク構想が立ち上がりました。次世代につながる町の活性化の一助となる自然を保護しながら活用しようというツーリズムです。このように自然保護に対する意識は高まっていると思いますので、今後は必要なお開発行為について、阿蘇市にとって何がベストか、よく皆で検討していくことが大切だと思います。」と高村さん。これから環境の時代。その先駆者として今後もがんばっていただきたい存在です。